



◎大阪市立此花総合高校と同扇町高校が統合再編し、府内初の公立の併設型中高一貫校として開校。校訓は「進取・創造・敬愛」。2016年度は、「グローバル化改革をふまえた、中高一貫教育校におけるアクティブ・ラーニングを中心とした新しい授業法の研究」に取り組む。

設立

2008(平成20)年

形態

全日制/総合学科・演劇科・食物文化科/共学

生徒数

1学年約240人

2016年度入試合格実績(現浪計)

国公立大は、北海道大、筑波大、京都大、大阪大、神戸大などに35人が合格。私立大は、東京理科大、法政大、同志社大、立命館大、関西大、近畿大、関西学院大などに延べ332人が合格。

住所

〒554-0012
大阪府大阪市此花区西九条6-1-44

電話

06-6464-8881

Web Site

<http://swa.city-osaka.ed.jp/swas/index.php?id=h543541>

大阪府・大阪市立

咲くやこの花中学校・高校

進路指導

高い目標を持たせる 個に応じた指導で、 希望進路の実現を図る

変革のステップ

背景

◎生徒の希望進路が多様で、生徒間の学力差が大きく、個に応じた進路指導が必要に。全体的に生徒の進路意識が高くないことも課題だった

実践

◎学校全体で進路指導方針を共有し、体系的・計画的な指導を開始。生徒の進路意識や学力の向上を図る授業や補習、個別指導にも力を注ぐ

成果

◎生徒の進路意識や学力は確実に向上し、前身校と比べて進学実績が大幅に伸びた

STEP 3

生徒の可能性を伸ばすため
新たな進路指導を構築する

大阪市立咲くやこの花中学校・高校は、2つの市立高校が統合再編して、2008年4月に開校した併設型中高一貫校だ。理数・ロボット工学・スポーツ・言語文化・造形芸術・映像表現の6つの系列から成る総合学科と、演劇科、食物文化科を擁しており、生徒の専門や興味・関心は幅広い。森知史校長は次のように語る。

「総合学科を中心とした中高一貫校の本校は、全国的にも珍しい形態です。専門や興味・関心の異なる生徒が学び合う環境は、本校の強みである反面、指導上の難しさもあります。特に、開校時からの課題が進路指導だ。現在、生徒の進路は難関国公立大学から就職まで多岐にわたり、学力の幅は、ベネッセのG・T・Z(*)で表すとS1からD3まで混在している。

「生徒はそれぞれ異なる進路を目指しており、一斉指導ではとても対応し切れません。個々の生徒を丁寧に見取り、それぞれに対応した指導が求められています」(森校長)

さらに、生徒の進路意識があまり高くないことも課題だった。前身校の教師だった総合学科長の栗本要人先生は、次のように指摘する。

「前身校では、指定校推薦入試で受験できる学校から進学先を選ぶ生徒も多く見られました。その結果、進学先を中退する卒業生も

*学習到達ゾーンのこと。ベネッセのテストにおける共通の評価指標。「S1」～「D3」の15段階で評価される。

いました」

大学進学希望者が少なかったため、学校に進学指導の経験が蓄積されていない面もあった。

「前身校からそのまま異動してきた教師が多かったこともあり、進路指導も前身校と同じようにしようとしていました。しかし、生徒の可能性を最大限に伸ばすためには、新



森 知史 もり・さとし
大阪市立咲くやこの花中学校・高校校長
教職歴29年。同校に赴任して4年目。「常に謙虚に努力すること」



栗本 要人 くりもと・かなと
大阪市立咲くやこの花中学校・高校
教職歴20年。同校に赴任して9年目。首席。総合学科長。「確固たる信念とバランス感覚を持って指導にあたる」



田中 愛子 たなか・あいこ
大阪市立咲くやこの花中学校・高校
教職歴18年。同校に赴任して9年目。進路指導
主事。「心の壁を乗り越えるため、「ともにふんばる」



松下 弥生 まつした・やよい
大阪市立咲くやこの花中学校・高校
教職歴23年。同校に赴任して9年目。進路指導部
主任。「学年や生徒の特性に合わせた指導を臨機応変に行う」



新崎 竜平 しんざき・りゅうへい
大阪市立咲くやこの花中学校・高校
教職歴3年。同校に赴任して4年目。進路指導部
主任。「教学＝難しい」という思い込みをなくしたい」

な学校として進路指導を見直す必要がありました」(栗本先生)

センター試験の受験を勧め、 一般入試まで頑張る雰囲気醸成

10年度、同校は進路指導改革をスタートさせた。新たな進路指導方針に掲げたのは、大学進学希望者の一般入試での合格だ。以前は、進学先を早く決めたいといった理由から、指定校推薦入試を利用する生徒が多く、進路決定後は学習意欲が低下する傾向が見られた。そこで、希望進路の可能性を広げるために、「ガイダンス」や「面談」などで進路目標を高く設定するように促し、センター試験の受験を強く勧めた。

「私立大学にもセンター試験利用入試があるので、大学進学希望者であれば、センター試験は共通の目標となります。『みんなでセンター試験を受けよう』と呼びかけ、一般入試まで頑張る雰囲気づくりに努めました」(栗本先生)

当初は生徒だけでなく、保護者からも「指定校推薦入試で受験はできないのか」と問われたが、生徒・保護者の双方に、目標を高く持ち、挑戦する大切さを根気強く伝えて説得した。

そうした指導により、安易な指定校推薦入試の利用は減り、センター試験の受験者数は10年度の9人から、15年度には82人と大幅に増えた。

基礎・基本を重視する授業と 各種の「セミナー」で進路をサポート

生徒の希望進路の実現に向け、学力向上の取り組みにも力を入れた。まず、どの教科でも、基礎・基本の定着を授業で徹底することにした。

「本校から東京大学や京都大学を目指す生徒が出るようになると、当初は、その方針でよいのかと心配する教師もいました。新設校で進学実績がないため、その根拠を示すことはできませんでしたが、難関大学志望者でも、教科書の内容を十分に理解することは重要で、す。『学力の土台をつくるのが授業だ』と信じて、基礎・基本を大切に授業を続けました」(栗本先生)

授業を補完して、さらなる学力向上につなげるのは、教科・レベル別に行う進学補習「セミナー」だ。「放課後セミナー」は、1・2年生は国語・数学・英語、3年生はさらに理科・地歴公民も加えたら教科で行う。主に演習と解説が中心の講義形式だ。土曜日に図書館を開放して実施する「土曜セミナー」は、自学自習を促すことが目的で、分からない問題は大学生アドバイザーの指導を受けられる。さらに、長期休業中の「集中セミナー」は、各学年で講座を開講。例えば、夏休みは約40講座を用意し、生徒は自由に選択して受講する。

1年間を通してセミナーが行われるため、そ

の様子に刺激を受けて、学習意欲を高める生徒もいる。進路指導部の松下弥生先生はこう語る。

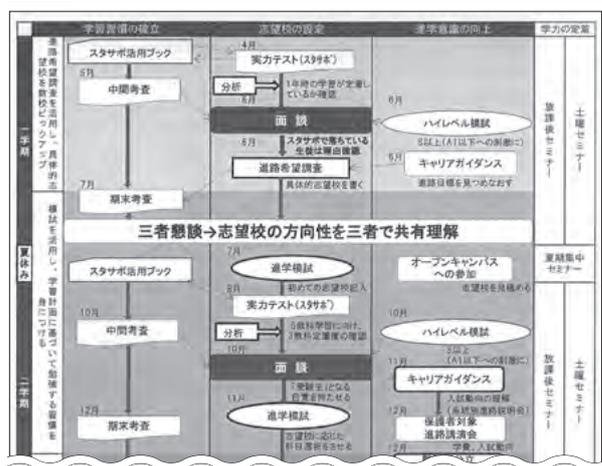
「ある教科のセミナーを希望する生徒が集まり、教科担当の先生に直接交渉して実施が決まったこともありました。また、セミナーとは別に、放課後に生徒が集まって教え合う姿も見られます。そのようにして、生徒と教師が一体となって学びに向かう『チーム咲くや』の雰囲気が生み出されています」

教師の考えや思いを集約した「進路指導マニュアル」を作成

3年間を通した体系的・計画的な進路指導にも着手した。まず、11年度に指導の目線合わせを目的として、独自の「進路指導マニュアル」を作成。これは、各学年の進路指導の目標を示し、それを実現するための指導チャート、時期ごとの模試受験の目的、大学レベル別の指導法、就職指導計画などを具体的に示した冊子だ。例えば、2年生の指導チャート(図1)では、「学習習慣の確立」「志望校の設定」「進学意識の向上」の観点から、各時期に求められる指導の詳細を記している。それらの内容は毎年見直しており、16年度は約30ページとなった。

「進路指導マニュアル」の活用も後押しし、教師間の意識や指導法の共有が進み、指導のばらつきが見られなくなった。生徒は、学校の進

図1 2年生進路指導計画「基礎力」をつける 指導チャート



*学校資料をそのまま掲載

路指導に対して安心感や信頼感を抱くようになったという。また、新任教師や他校から異動してきた教師でも、すぐに同校の指導方針に沿った指導が可能となった。進路指導部の新崎竜平先生は、自身の着任の頃を振り返ってこう話す。

「私は進路担当ですが、生徒から就職について質問された時に『担当ではないから分からない』とは答えられません。『進路指導マニュアル』には、必要な情報が網羅されているので、初めての進路指導でも、生徒の質問に対して具体的に回答できました」

「進路指導マニュアル」の作成・活用は、校内のコミュニケーションを活性化させると、進路指導主事の田中愛子先生は説明する。

「各ページの作成は担当の先生方にそれぞれ依頼し、できた内容について、進路指導部内や関連する教師から意見を聞きます。その意見を基に作成担当の先生方と協議して、内容をよりよくしていきます。完成後は、学年との打ち合わせや様々な会議で活用することにより、進路指導部以外の先生方も巻き込んだ指導ができるようになりました」

進路指導の軸となる面談は、「進路指導マニュアル」に面談を行う適切な時期を学年ごとに示し、それぞれの時期に伝えたいことを整理した。

「進路指導の最前線にいたるのは担任です。面談は、生徒に目標を確認させたり、時期に合った情報を提供したりと、生徒の進路意識を高めます。生徒から悩みを聞いて信頼関係を深めるなど、担任と生徒をつなぐ上でも大きな意味があると捉えています」(田中先生)

スタディーサポートを活用した「ガイダンス」で学力を引き上げる

生徒間の学力差の改善を目指し、ベネッセの「スタディーサポート」を活用して、GTZ別の「ガイダンス」も行っている。

「GTZのA2程度以下の生徒の多くは、目標の立て方や学習の仕方が分かっています。そこで、GTZを目安にして、より細かい指導を実施しています」(松下先生)

「ガイドランス」では、「今はG・T・Zのこの位置にいるから、次はここを目指そう。そうすると、このような大学などがねらえる。こんな勉強が必要になる」など、具体的に話す。さらに指導が必要だと思われる生徒には、個々に話を聞いて状況を把握し、個別指導を行うこともある。

「教師と1対1で話す」と、『頑張ろう』『しっかりやらなければ』という気持ちになりやすいようです。生徒の姿を見て、学力レベルに合わせた意欲の高め方を工夫することが重要なのだと改めて感じました」（松下先生）

また、主に成績下位層の生徒を対象とする補習「学び直しセミナー」も新たに開講した。数学と英語が中心で、教師が指名した生徒や希望者が受講。このセミナーでは、授業と同じ内容をもう一度教え、理解を深めさせている。

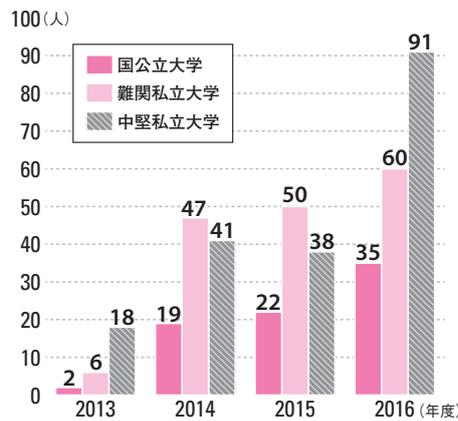
進学実績が大幅アップ、指導方針に確信を持つ

中学校から入学した1期生が臨んだ14年度入試は、6年間の教育の成果が試される機会とあって校内外から大きく注目された。結果は、前年度比で、国公立大学合格者数は2人から19人、難関私立大学合格者数は6人から47人と大幅に増えた（図2）。京都大学、大阪大学の合格者とともに2人出るという快挙も成し遂げた。

「教師の思いを感じ取り、自分たちの背中

を見て、後輩たちがついてきてくれるはずという思いで頑張った生徒も多かったようです。この結果を受け、指導の方向性は間違っ

図2 主要大学合格者数の推移



*学校資料を基に編集部で作成

ていないと手応えを感じました」（田中先生）
 その後も進学実績は向上し、16年度入試の合格者数は、国公立大学35人、難関私立大学60人となった。地域からの評価も高まり、高校から入学した生徒の学力も徐々に向上している。

「生徒間の学力差は、他校に比べてまだ大きい状況です。多様な生徒の学力を確実に底上げし、毎日の授業を1つレベルアップさせることを目指して、アクティブ・ラーニングも充実させています。15年度は英語を中心に取り組み、16年度は全教科に拡大しました。『公立の総合学科の中高一貫校は、ここまでできる』という誇れる成果を目指し、ぶれない教育を継続していきます」（森校長）

若手教師が語る、指導変革への情熱

ほかの先生方を巻き込み、チームで教育をつくり上げたい

進路指導部 新崎竜平

進路指導部の一員として、生徒に高い目標を持たせるという方針の下、日々生徒に接しています。生徒の希望進路が1年後に変わっていることは珍しくありません。その時に後悔しないように、「選択肢の幅を狭めずに、今から精いっぱい頑張っておこう」と生徒によく話しています。

数学の教師として、積極的にセミナーを開講することも心がけています。担当している「学び直しセミナー」では、授業とはまた違うかかわりを通して、生徒との信頼関係を深められるのがうれしいです。生徒の信頼を得られると、担当のセミナーや授業以外のことも気軽に質問してくれるようになります。

本校には1対1のコミュニケーションが比較的得意な人懐こい生徒が多いのですが、集団の中に入ると静かになってしまう傾向が見られます。進学や就職をしてからも活躍できるように、集団の中で積極的にコミュニケーションを取る力も身につけさせたいと思っています。

私が試行錯誤する姿を見てアドバイスをしてくれるなど、本校にはチームで教育をつくり上げたいという考えを持つ先生方が多くいます。「こんなことをしたい」と思い切って提案したところ、「いいね、やってみよう」と受け入れられて驚いたこともあります。そのような学校文化を引き継ぎ、ほかの先生方を巻き込める教師になることが、今の私の目標です。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2010年10月号指導変革の軌跡「群馬県立前橋東高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け